

少女の語り
有馬頼義

少女の語り

有馬頼義

文藝春秋

少女の語り

昭和四十四年十二月二十日 第一刷

定価 四九〇円

著者 有馬 頼義

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

電話東京二六五局一二一一

郵便番号一〇二

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

目次

少女の語り 3

死の破片 49

ディシジョン・ポイント 97

秋つゆ 145

熱(ほとほり) 193

惑いの夜 227

カ
バ
ー
テ
ラ
コ
ッ
タ
木
内
克

少女の語り

△私の血管のなかを流れているのは、もはや血液ではない。シェーファアのインクか、睡眠薬の溶液でしかない。だから私は、もう小説を書くことは出来ないだろう……▽

この奇妙な小説は、そこからはじまっていた。そういう風な書き出しではじまっているのである。わたしは、実際、彼の書いた最後の小説の最初で最後の読者になったわけだ。彼の生涯は、それほどたいしたものでもなかったし、彼が小説家として大家でもなかった証拠に、彼の死後、彼の全集も出なかったし、わたしが最初で最後の読者になった彼のこの奇妙な小説も、結局は活字にはならなかった。

わたしが、はじめて、彼とかかわり合いを持ったのは——彼が死ぬ二年程前、彼の小説がテレビ・ドラマになったときであった。わたしはそのとき大学生で、新聞で、そのテレビ・ドラマのアシスタント・ディレクターを募集しているのを知って、アルバイトとしては、適当な小遣いかせぎだと思って応募してみた。勿論百人を越える応募者の中から、わたし一人だけが選ばれると

は予想もしていなかったが、意外にも、わたし一人が合格した。もっとも、多少のコネがなかったわけではない。つまり、——この作品の中では、あまり重要な人物ではないのだが、わたしの好きな男の上級生が、学生運動をやりながら、そのテレビ会社につとめていたのだ。しかし実際、同じアルバイト学生に過ぎないその男の発言に、どれほどの力があつたか、今でもわかってはいない。

そのテレビ・ドラマの仕事は、それが企画されてから、終るまで、半歳の時間を要した。わたしの主な仕事は、シナリオ・ライターが書いた第一稿を原作者である彼に見せ、OKをとり、ディレクターに渡し、時にはまた更にその訂正あるいは修正を、シナリオ・ライターに求めることであつた。

この仕事は、大してむずかしいもののように思えなかった。ずっと後になって、わたしは、全く盲、蛇におじずのたぐいで夢中でやっていたので、ほんとうは、たいへんな内容を持っていた仕事であることがわかつたのだが、その頃は、少しも気にしてはいなかった。

現場での仕事にも、わたしはすぐに馴れた。わたしはいつも、チーフ・ディレクターのとなりに坐つていればよかった。音声や、ビデオとの電話連絡や、スクリプトのようなことが仕事の内容であつた。そしてまた、わたしは、彼の原作、もしくはディレクターの演出するテレビ・ドラマの成果について、何の責任もなかったし、興味もなかったと云える。昼間大学へ行つて講義をきき、夕方、スタジオ入りをする。勿論仕事は秒きぎみだから、緊張はしていなければならなかつたが、その一日の仕事を終つて、スタッフたちが「お疲れさん」と声をかけ合つて、散つて行

けば、わたしは、もう一人ぼっちの女に過ぎなかった。親の家へかえるか、スタッフの人たちと一杯のみに行くか、恋人のアパートへ行くか、全くわたしの自由なのであった。今考えても、あの頃の一日は、かなり充実していたと思う。全くと云っていい程興味を持ていない仕事で一日を充実させるということは、——恋人との時間を別にしても、わたしに正常な日日の生活を要求した。

わたしが、ちょっと、この仕事に興味を持ち出したのは、そのテレビ・ドラマが、数週間の放映を終えた頃である。

一つの原作があつて、あるプロデューサーが、会社の会議にかけて、それを軌道にのせる。あとはディレクターと脚色者と原作者と出演者だけの問題である。わたしは、原作者である彼と、脚色者である彼女と、ディレクターの間に、かなり意見の相違を発見した。三人、——つまり原作者と脚色者とディレクターは、事前に何度も、その作品の指向する問題を話し合っていた筈なのに、脚本を読んだ後、原作者は、途中から、かなり手を加えるようになった。それは、ドラマの流れの中で、女性である脚色者の思惟の流れが、かなり違って来てしまったためであった。わたしにはよくわからないが、この場合、原作者は、すべてを脚色者にまかせるべきではなかっただろうか。ところが、チェックされた脚本を、ディレクターが更にチェックするようになった。つまり後半にはいる少し前から、脚本は女っぽいドラマであつたのが、男っぽいドラマにかわつて来たわけである。

どうもわたしの考えでは、その時点では、原作者とディレクターが、合意点に達しているかの

ように見えた。その結果——わたしは、テレビ・ドラマが、何故そういう手続きを踏まなければならないのか、今でもわかっていないが、ディレクターから注文が出て、脚本の書き直しを求める回数が多くなった。つまりその走り使いを、わたしがしていたのだ。

脚色者は、わりに売れている中年の女性であった。わたしは単に事務的に仕事をしていただけで、彼女はしばしば、文句を云った。つまり、放映されたドラマを見て、彼女は、自分のものが全くはいいない、と云い出したのである。自分のものとは何だろうか。それは、脚色者としての誇りのようなものであったかも知れない。ディレクターは、脚本があるにもかかわらず、原作にある会話をそのまま使った。そこで、ディレクターに権利があったかどうか、わたしは知らないが、ある日、脚色者である彼女は、この番組のプロデューサーに面会して、事情を説明し、これでは自分の立つ瀬がないと云った。そこでプロデューサーは、ディレクターを連れて来て、意見を述べさせた。わたしも同席した。驚いたことに、同じ原作に対して、二人の意見が、全く違ってしまったことであつた。わたしには、どっちが悪いのかわからなかったが、少くとも進行しているその時点で考えれば、原作を、ディレクターが自分で脚色しているような印象を受けたし、脚本というものが、どんな意味を持っているか、たいへん疑問を持った。

その席で、彼女は、この番組から、おろしてくれ、とプロデューサーに要求した。もしそれが実現すれば、番組のタイトルから脚色者の名前が消えるわけだが、その結果を、彼女は、どう考えていたのだろうか。しかしプロデューサーは、なだめ役に回った。ディレクターをおさえつけながら、脚色者に、自分が何とかするから、それだけは前例がないし——ディレクターが交替し

た前例はあったが、何ともかっこうがつかないから、辛抱してほしいと懇願した。ディレクターは涼しい顔をしていた。現場の強みであった。

「じゃあ、原作者は、どう思っているの」と彼女は云った。

「勿論」とプロデューサーは答えた。「脚色者をきめるときに、はっきりあなたのお名前を挙げています」

「じゃあ、どうして、あたしの脚本が、めちゃめちゃになっているのを、黙っているの？」

「一度原作者に逢って、話をしてみます」とプロデューサーは云った。

「口惜しいったら、ありゃしない。あたし、あなた方をうらみますよ」と彼女は席を立てしまった。

実を云うと、原作者にそのことを伝え、彼の意見をきく役が、わたしに押しつけられてしまったのであった。

彼はそのとき、雑誌社の仕事をするために、都内のホテルにいた。わたしは彼の部屋に電話をかけた。すぐ降りてゆく、という返事であった。

わたしはそのとき、ロビーへ降りて来た彼の姿なり、話なりを聞いて、もっと早く、今日の状況を察知すべきであったかも知れないが、一見して彼は、疲れている、という風であった。彼は黙って次回の脚本に目を通しながら、二、三チェックをした。それは小説家である彼が好んでするところの、会話や、モノローグの文章についてであった。それからわたしは、脚色家の話をした。彼の答えは、かんたんであった。

「シナリオ・ライターは、もっとオリジナルを書くべきだ」

つまり、彼ももはや、脚色家の存在を認めていない風であった。

「ところで君」と、彼は云った。「この番組がすんだら、どうする？」

「別に考えていません。ディレクターが、次の番組も手伝ってくれと云っていますが、大学も出なければなりません」とわたしは云った。

「先の話だけれどね。この仕事がすんだら、アルバイトで、僕の家へ来てくれないか。つまり、僕はもう目が悪くなっているし、調べものも自分では出来ない。新聞もろくに読めないんだよ。それに、来年新聞小説を頼まれているしね。君が午後だけでも来てくれれば助かるんだ」

「考えてみます」とわたしは答えた。

彼はその場で、条件を提示した。何のためにわたしはホテルへ行ったのだろうか。次のアルバイトのことは別にしても、現実の問題では、原作者も脚色を否定していることになった。わたしはその通りに、プロデューサーに報告した。

△何故、こんな風になってしまったのか、私は、義務のようなものを感じている。これが小説でなく、一種の記録になっても、残りさえすればいいと思う。

戦災で、私たち夫婦は、家を失った。その頃はまだ子供もいなかったもので、東京郊外の、ある老人夫婦の家の三畳を借りることが出来た。昭和二十一年のことだ。その家はいいところにあったが、老人夫婦が使っている八畳の部屋と台所以外には、私たちの借りた三畳しかな

かった。それでも戦災で追われ、家をやかれ、東京へ戻れずにいる人達にくらべたら、幸いであつたと謂うべきだろう。しかし私は当時、全く定職というものを持っていなかった。戦前は小説家を志していたが、ものにならなかった。あっさり転業してしまえばよかったのだが、なまじ文学に執着したおかげで、暮しに困るようになった。それで私はそれから数年間、大学時代の教授のほん訳の下請をもらって来たり、世界の有名文学作品のダイジェスト版を書いて、雑誌社へ行って、売り込みにけんめいであつた。しかし、どうやら暮してはゆけたところが一つの問題があつた。私は机の上で仕事をするから、三畳の部屋に机と椅子を入ると、蒲団が敷けない。それで仕方なく、一間の押入れの中をからにして、妻を下段に、私が上段に寝ることにした。奇妙な話だが、それはそれで一つの解決であり、意外に面白かつた。ところがどうしても解決出来ない問題があつた。私は、昼間は原稿を売り歩き、夜、仕事をしなければならなかつた。夜の仕事は、当然夕方まで続く。それが終ると私は昼まで眠るわけだが、この眠りをさまたげるものがあつた。家主の老夫婦は、通いの婆さんを一人使つていて、その婆さんが、朝の七時頃にやつて来て、台所で仕事を始める。台所と私たちの三畳とは、襖一枚で遮^{しやへい}蔽^{へい}されているだけであつたから、私が寝ついた頃、台所の物音で目をさましてしまう。私は、耳に綿をつめたり、極力仕事の時間をずらしたりするようにつとめたが、物理的に、どんな方法も、解決にはならなかつた。それで、婆さんが来て物音を立てても目がさめないように、睡眠薬を使いはじめたのであつた。当時は、あやしいアルコールで目をつぶしたり、ヒロポンが流行して人が死んだりしていた時代で睡眠薬を使って眠る

こと自体、自分の立場から云っても、ひとが見ても、たいしたことではなかった。そして、当分、その方法は、僕に毎日の眠りを与えてくれた。しかし眠剤にも習慣性がある。私はBという薬を使っていたが、使用量としては、五〇八錠という指定があった。私はそれを甘く見ていたのかも知れない。最初五錠で眠れたものが、八錠になり、十錠になった。しかし、仕事をしてゆくために、その位のこととは仕方がないと私は思っていた。十錠を超えたら、ウイスキーを併用すれば、婆さんがとなりで、がちがちでも眠れるという自信があった。

そういう状態が、二年程続いた。すると、突如として、老夫婦が、その家を、私たちに預けて、どこかへ行ってしまったのだ。多分、小金をためていて、何処かに家を新築したのであると思う。だから突然に、私たちは自由になったのである。もう邪魔者はなく、私は寝ようと思うときには、いつでも寝られる状態になったのだ。そこで、私は、再び、正常な生活に戻ろうとした。つまり、朝起きて、夜寝るということが出来ると思ったのだ。しかし、二年もの間、薬を使っていると、急に眠れるものではない。夜眠るために、やはり薬とアルコールが必要であった。それでもBの十錠は、たちまち倍の二十錠になった。しかし私はまだ安心していた。その頃私は、友人に忠告されて、薬をほかのものとかえてみたが、どういうわけか、例えばHだと、朝、足をとられたり、Mだと、全くきかなかったりして、結局Bに戻った。ウイスキーは高いので、日本酒にして、薬と一緒に一合ずつのむことにした。その辺までは、実際何も副作用はなかったのである。私の小説は、その頃から、少しずつカストリ

雑誌に売れはじめた。警察の監視が、上陸した連合軍の命令によって、ある程度おさえられ、検閲制度が廃止され、一応言論の自由な時代がやって来たのである。しかし、私には、立派な小説は書けなかった。書けば書けたに違いないのだが、とても私の書いた小説は、芸術ではなく、一日一日の生活のためには、文芸雑誌の誌面をかざるに程遠いものであった。とも角喰わなければならなかった。カストリ雑誌の原稿料は一枚百円であったが、出版界がまだ完全に正常な姿になっていなかったから、その一枚百円で三十枚程の小説の原稿料も、一度にはもらえない。三回位足を運んで、もらい、そのついでに、次の注文をとるような状態であった。私たちの仲間は沢山いた。みんな小説家だが、原稿料をとりに行つて、顔を合わせることが多かった。

「とれたか？」

「いや、三分の一だ」

「俺もだ。これっぽっちもらつたって仕方がない。のんではまえ」ということで、せっかくもらつた千円ほどの金が一日で飛んでしまうことがある。しかしそれでも私の家は、女房の内職などの収入で、最低限度の生活は出来た。私は、戦争がはげしくなつてからその時期に至るまで、牛肉というものを喰つていなかったが、それは、ぜいたくというものだろう。そのうちに、カストリ雑誌に書いていた仲間の何人かが、文芸雑誌にひろわれたり、新人賞をもらつたりして、少しずつへって行つた。後に大流行作家になった奴は、まだその頃は、私と同じように、あっぱあっぱしていた。

私はその頃から、ものを書くときに、手がふるえることに気付いた。これは、栄養失調のせいもあったが、薬の副作用というか、禁断症状のように思われた。それで、手がふるえると、昼間でも少量の薬をのんだ。それで一時しのぎが出来た。私はまだそのとき、後に私を徹底的に叩きのめしたものの正体を見ていなかった。B二十錠と、日本酒一合で眠れていた時代である。仕事はあいかわらず、少しも暮しの足しにはならなかった。妻の内職の方が、私の収入より多い時の方が多かった。私は悩んでいた。何とかならないか。私はやはり、ほかの職業に転じるより、いい小説を書くべきだと思った。必死であった。朝から晩まで、小説のことを考えていた。その間に、薬は、少しずつふえていった。小説のことや、将来のことを考えて、眠れない日の方が多かったし、小説を書くとき、正気でいるよりも、少し薬がはいっている方が、発想が奇抜で、筆も進んだ。しかし、そういう小説は、カストリ雑誌には向かない。カストリ雑誌には、ベッド・シーンを書いていけばよかった。しかし、それだけでは私の良心が許さない。それで、少しはまともな小説が出来ると、文芸雑誌の編集部をまわりはじめた。誰かと知り合いになり、原稿を預けて来る。そして待つのだ。しかし預った方は、こっちが生命をかけている程には気にしていない。恐らく、読んではいなかったのだろう。十日間ほど経ってその編集者をたずねると、預けた原稿を持って来て、ぼんと机の上に置く。埃だらけであった。多分それは、誰にも読まずに、棚の上か何かにつんで置かれたものであった。私は、その作品の何処が悪いのか、たずねたが、編集者は、力不足で全体的に未熟だと云った。読んでいない証拠であった。私は、その小説を持って帰り、もう一度目